吉野川ラムネット通信

Vol.10

2017年1月1日 発行

2017年明けましておめでとうございます。
今年も「吉野川をラムサールに」をよろしくお願いいたします。

最近、河川工学がご専門の大熊孝先生の話を聞く機会がありました。「山川草木悉皆成仏　山川草木悉有仏性」と示され講演されました。この言葉は、仏教の教えで、生きとし生けるものに命があり成仏できるという意味だそうですが、古来、私たち日本人と自然との関係性を言い表しているように思います。大自然の中にあっては、人間も自然の一部にすぎず、こんなに技術が進化した今日でも、自然を人間は、安易に壊したりして、思い通りにコントロールできると傲慢に思ってはいけないと戒めていると。（私流の解釈ですが）スーパー台風など、自然からの報復が、すでに始まっているのかもと心配していますが、どうでしょうか？

さて28年度の環境白書には、「高度経済成長以降の開発により、森林、農地、湿原、干潟のような生態系の改変が進んだ結果、これまでに干潟の面積の４０％が、消滅したこと、河川横断施設等が、上流と下流、河川と海との連続性に影響を与えており、河川の連続性の低下は、河川を遡上する生物の移動を妨げる可能性がある。」とあります。そして藻場や干潟に依存していた魚の漁獲量も減少しており、海面漁業の漁獲高はピーク時の30%、内水面の漁獲高はピーク時の20%に落ち込んでいます。これは、過剰に利用していることと生息地の破壊が進んでいるからです。

このように見てくると、今ある藻場や干潟を保持していくことが、いかに重要であるかが、わかります。吉野川河口域には、日本最大級の干潟があり、第十堰から河口まで汽水域となっており、高い生物多様性の宝庫です。この豊かな恵みをもたらす吉野川を次世代へ引き継ぐために、ラムサ-ル条約が謳っている「賢明な利用（ワイズユ-ス）」を進めながら、四国で最初のラムサ-ル条約登録地となるように他団体とも連携を図りながら活動を進めますので、今年もみなさんのご理解とご支援をお願いいします。

藤永知子

吉野川の思い出

　私は高校生くらいまで、本当に吉野川と毎日のように関わり育てられてきました。私の生家は上助任町の吉野川橋のすぐ近所でした。

　物心がつき始めた３～4 才の頃は、よく隣のおばさんに連れられ、水上飛行機の発着を見に行き「すごいなあ」「おおきいな～」と感激していました。現在では発着場の跡らしき場所があるだけです。

　小学生になると、家族みんなで、ひなまつりなどに普段食べれない巻き寿司や卵焼きなどを遊山箱に入れて、吉野川の土手やレンゲ畑に座っておいしく食べました。つくし採りや菜の花、レンゲで首飾りを編んだりして楽しく一日を遊びました。小学校の遠足も吉野川でした。

　小学生高学年になると夏休みは（潮の満干にもよりますが）朝のラジオ体操が終わると、午前中は川にゴカイを掘り行くとたくさんいました。一休みして潮が満ちてきたら、竹竿にテグスとおもりと針だけがついた昔のシンプルな竹竿とゴカイを持って釣りに行きました。ハゼ.キビレ．ウナギなど色々と釣れ、夕食に並びました。

　５～７月頃の大潮の干潮時などは、シジミとうす貝を採る人でいっぱいでした。台風で大水が出て水が濁った時にはウナギが大量に釣れるので釣り人でにぎわいました。
　冬になると青のりが岸辺の岩にべったりとつくので採ってきては縄に吊り下げ、寒風で乾燥させ、ご飯のふりかけや、火鉢で焼いて炙ってたべていました。お正月には青のりのお餅には欠かせませんでした。まさに一年中、吉野川の豊な恵みによって生活をしていました。

　中学生になると「新町川の樋門で飛び込んで泳いでもいい」と言われ心待ちにしていましたが、事故があったり、水質が悪くなったりで、水泳が禁止されました。小学校の頃には、川底まで透き通って見えていましたが、中学生になった頃には飛び込んでも見えなくなっていました。工場の排水の垂れ流し、貯木場（新町川の両岸はいつの間にか材木がびっしりと並ぶようになっていた）では、水が滞り、生活排水もそのまま流していました。こうした中で、ゴカイ.うす貝.カニなどヘドロに弱い生物の姿が消えていきました。鳥の姿も少なくなり、千本杭周辺に生息していたカブトガニも見られなくなりました。

　学校から「川では泳いではダメ、あんまり近寄らないよう」と指導がされ、子ども達は吉野川に近寄れなくなりました。芦原で、湿地帯や田畑もあった河川敷は整備され、たくさんいたと思われる湿地帯の動植物は。激減しました。
　私は、４０年余り仕事と時間の都合で吉野川から離れていましたが、最近は時々釣りに出かけています。水質は少しずつ良くなっています。こんなにも雄大で、満々の水をたたえた美しい川は他にない。たくさんの生物を育んできた吉野川をこれ以上、壊さず、豊かな生物の宝庫として守っていくことができれば、少しでも力になりたいと思っています。

武市正治

～吉野川礼讃8～

吉野川のおいしい水

今年の第 32 回水郷水都全国会議は、福井県越前大野市で、開催された。日本有数の豪雪地であり、名の通り、白山に蓄えられた雪により、この町は、豊富な湧き水の町として有名だった。

しかし、あまりにも配慮のない水利用等から湧き水、地下水は、激減した。今回のテーマは、「”水“がいきるまちをめざして」ということで、持続可能な社会の実現にむけて「水利用の見直し、水循環の回復と維持」が必須だと確認した。越前大野は、湧き水・良質の地下水を使って酒造り、醸造業が、盛んだった。

私は、「ノンアルコール」でもアルコールを検知できる下戸なのだが、清流吉野川の水で酒造がないわけがないと調べてみた。

正に池田町に「芳水」「三好菊」「今小町」「笹緑」。美馬町に「司菊」。貞光町に「齢の友」、脇町に「剣鯛」、「富士の雪」、阿波町に「瓢太閤」。旧吉野川（本来吉野川）流路で。鳴門市に「鳴門鯛」「花乃春」「三拍子」。
ここ徳島市、国府「旭牡丹」、鮎喰に「南国一」，佐古「御殿桜」、福島「勢玉」、川内に「蘭玉」等々。

やはり良水あるところ酒はあるものだ。今日のように通行往来が繁多でない時代、その土地、土地の「地酒」が、醸されていて少しずつ異なった味わいをもっていたのだろう。おいしい水のワイズユ-ス？

河野眞理

スジ青海苔

吉野川の下流の冬の風物詩、スジ青海苔の養殖が今年も川面を彩っている。

写真は昔ながらの天日干しの方法
水洗い後、水に分散し、かき揚げながらロープに干す。数時間後ほぐして乾燥を促進

養殖といっても苗を植えるわけではない、種場と呼ばれる場所の水面付近へ網を張り、適水温になると浮遊してくる胞子を付着させ、その後抽選で決めた場所へ移動、発芽、成長を待つのである。
上流からの養分で成長するのは、地上の植物と同じだ。
散歩中に橋の上から見ると、その成長具合が良く判る。
緑濃く伸びた網を回収、海苔を刈り取り乾燥すれば完了。
磯辺揚げ、佃煮、お好み焼きに振りかけ、美味しそうな料理が次々に浮かんでくる。
休日、スジ青海苔を目当てに川遊びはいかが？

今年は 1 月 13 日(満月)と 28 日(新月)と 2 月 12 日(満月)が大潮の中心日、干潮はほぼ正午、潮汐は一日に約 46 分遅れるので干潮時を子供達に計算してもらい、その前後に下流域の両岸のコンクリートや石垣を見て緑色ののりが延びているなら、スプーン、ヘラ等で刈り取り、持ち帰り、良く水洗いをして、ロープや網を使って天日干し、乾いたら少し味噌汁に、或いはフライパンで焦がさないように炙ると良い香りに、スジ青のりは焼くと香り立つ！　醤油を垂らしご飯に乗せて頂く。　残りは粉にして料理に利用。

家族で遊ぶ吉野川、どうでしょう！
ただし、濡れた青のりを踏むと滑ります。気をつけて！

おいしい吉野川ごちそうさまでした。　　さちのちち

報告

- 11 月 15 日　「がんばる NPO 応援事業」
  吉野川ラムサール学習会
  NPO 法人とくしま県民活動プラザとの共催

講師：金井裕氏
ラムサール条約登録に向けて具体的な手続きなどをアドバイス頂いた。

- 11 月 19 日　国交省フィールド講座
  鬼ヶ州のナルトサワギク除去

お知らせ

- 3 月 5 日（日）ー 大田先生の「吉野川干潟環境についてのお話」
  吉野川河口干潟の市民調査報告
- 3 月 26 日（日）　春のウオーキング「こんなところ知っている」助任矢先付近の昔の護岸探検
  時間：AM9:30 集合　市の公園駐車場　　10:00 開始
  雨天等の延期の場合
  4 月　9 日（日）